



Title	Julien Sorelのhypocrisieと読み手の問題
Author(s)	粕谷, 雄一
Citation	Gallia. 1986, 25, p. 11-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9429
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Julien Sorelのhypocrisieと読み手の問題

粕 谷 雄 一

1. 本論の目的

hypocrisie というフランス語には普通「偽善」という訳語をあてるが、両語の間にニュアンスの差があることは否めない。辞書の定義を見ても、「偽善」が「本心からではなく、みせかけにする善事」(広辞苑)、「うわべだけを飾って正しいように、あるいは善人のようにみせかけること」(小学館日本国語大辞典)と定義され反対語は両辞典とも「偽悪」となっているのに対し、hypocrisieの方は「本当の性向や思想を隠したり、実際には持っていない意見や感情や美德を装う人物の性格、態度。〈反対語〉卒直、忠実、誠実」(*Grand Robert*⁽¹⁾)とある。このことから、また hypocriteの語源である古典ギリシア話のhypokritēs が本来「芝居の役者」を意味していたことからわかるように、hypocrisieの語の意味の核心は「外面と内面が一致していないこと」にある。このことから本論では立身出世のために信仰などを装うことに加え、恋愛におけるかけひきのためにわざと感情を偽るようなことも全て「普通の意味でのhypocrisie」に含まれるものとして扱うことにする。

本論は、『赤と黒』の主人公 Julien Sorelのhypocrisieの分析を通して「読み」という行為の探求に新たな可能性を提起しようという試みである。目下の筆者の関心は論理的整合性にあるので、あるいは一部の概念——特に「信仰」と「愛情」——の扱いが単純すぎるくらいがあるかもしれない。一つ一つの断定の哲学的吟味が今後の課題として残されているのである。

2. 普通「Julienはhypocriteである」が読みの前提になっている。

Julien Sorelの性格を云々する際必ず問題になってくるのが他ならぬ彼のhypocrisieである。読み手によっては陰險なhypocriteだからというのでJulienを嫌悪したり、またJulienの創造者たるスタンダールを批難したりしたのである。しかしこの作品を愛する読み手たちは、なんとかJulienを正当化してやろうとしてさまざまな論法を用いてきた。

たとえば責めを社会に向ける論法がある。

Julien Sorelは本当はhypocrite的精神の正反対で騎士道精神の持ち主なのである。
[...] だがこの大ブルジョワや僧侶の社会では、高潔さ、自然な高貴さ、勇気といっ

たものは、もう通用しない貨幣のようなものである。[...] 彼は赤の代りに黒を演ずる。サーベルの代りにhypocrisieが生活の道具となるだろう。(Maurice Bardèche⁽²⁾)

また、彼はhypocrisieのやり方がぎこちないので根っからhypocriteであるわけではない、と説明することもある。

Julienも時には虚偽に身を固めながら「ヒロイズム」に到達するだけのエネルギーをもち、タルチュフ顔まけの言葉を考えだすだけの頭を持っているのだが、そのかわり彼はペテンをするにあたっては、冷静な不誠実さといったものを欠いている。この不誠実さのみが、個人的選択とあいまって恒常性と自然さを保証してくれるのだが。[...] Julienはこの種族(fourbe accompli, hypocrite)の人間ではない。(Georges Blin⁽³⁾)

この他にも論法は枚挙に暇がないが、上の引用からもわかるとおり、この問題が扱われる際にはJulien = hypocriteが自明のものと見做され、その上でさまざまな価値判断が加えられる形になるのである。たとえ「本性上はJulienはhypocriteでない」と結論づけたい論者であっても「事実上はJulienはhypocriteである」を出発点にしているのである。

しかしこの「事実上Julienはhypocriteである」は、果して客観的に証明されうるのだろうか。

hypocriteが外的に認めうる言動と内面とが一致しない人間のことをいうなら、現実の人間をhypocriteと断定するのは究極的には不可能である場合が多い。だがJulienは小説の中の存在であり、人目のとどかないところでの彼の行動や隠された心の中まで読み手は知っているのだから100%確実にhypocriteか否か言うことができるように思える。これこそ、人は小説の中でしか真実に到達しえないと言えるゆえんなのではないのか。

しかし、以下の考察からもわかるとおり、筆者の立場から言えばこの判断は確実ではないのである。

3. Julienをhypocriteと見ないことも可能である。

Julienがレナル夫人に愛の告白をするところを例にとって考えてみよう。

Julienのつまらぬ虚栄心はなおもつづけるのである。とにかくこの女をものにしかなくちゃいけない。そうしておけば、いつか出世してから、なんで家庭教師などという下賤な職についたのかと誰かに難くせをつけられても、それは恋のためだったということにできるわけだからな。

Julienはいったん自分の手を夫人の手から離し、再びその手を取って握りしめた。

真夜中近くなって客間に戻るときレナル夫人は小さな声で彼に言った。

「あなた、あたしたちを置いて、どこかへ行ってしまおうんですか。」

Julienはため息をつきながら答えた。

「行かなければならないと思います。あなたを心底愛しているからです。これはあやまちです... 若い僧侶にとって、なんて恐いあやまちでしょう！」(第1部第13章⁽⁴⁾)

ここには確かに *hypocrisie* があるように見える。口では聖職に課せられた義務と誠実な愛情について語っているくせに、心の中は言葉と全然違う打算的な考えが支配しているからである。加えて我々読み手は Julien が結局レナル夫人「誘惑」に成功することを知っているのだから、ここに見えるような *hypocrisie* をその成功の原因と見做すことが可能なのである。それならば Julien は十分意識した、熟練した *hypocrite* であって、あとでレナル夫人を本気で愛するようになったとしても、少なくともこの時点では愛も、そしてもちろん信仰も存在しないことになる。

しかし可能な解釈はこれだけではない。

仮りにこの場面の彼を、内心の考えは無視して外側からのみ、行動主義的見地に立って眺めてみたとしても。「事実によって判断してほしい⁽⁵⁾」と言っていた Julien の願いをかなえてやるわけである。すると彼は、僧侶となるべき身にとっての義務とまことの愛情との板ばさみで本当に苦しんでいるあわれな若者と見えてこないだろうか。つまり Julien は本当に信仰を持っているし、レナル夫人を最初の出会以来一貫して愛しつづけていると考えることが可能だということである。そうすると夫人との密通も *hypocrite* 的な打算ではなく、むしろ男性としてごく自然な衝動に身を委ねてしまった結果であり、彼が批難されねばならないとしたらそれは *hypocrisie* の故ではなく *faiblesse* の故であるということになる。宗教的信仰の方も同様で、女性関係の問題を除けば Julien は一貫してむしろ相当模範的な神学生なのだから、本人は不信心者のつもりでもそのことを客観的に証明することは困難である。「彼は聖書を全部暗記しております。いったい不信心者が聖書を何年もかけて覚えたりするものでしょうか⁽⁶⁾」と陪審員に訴えかけるときレナル夫人はあながち間違っているとは言えないし、嘘をついているとも言えないのである。

このように「Julien は *hypocrite* である」と「Julien は *hypocrite* でない」という2つの命題は『赤と黒』の中において同様に成立すると考えてよい。

4. Julien の *hypocrisie* は「*hypocrisie* 信仰」であるとして。

とは言え、「Julien は *hypocrite* ではない」の方を無条件に成立させるのは確かにためられる。読み手は彼の頭の中に陰険な考えがあるのを知っているし、また彼自身「おれの生涯は *hypocrisie* の連続だ⁽⁷⁾」と考えているように、とにかく Julien の意識の上では彼は *hypocrite* にちがいないのである。

ここでへこたれず「Julienは hypocrite でない」の方を正当化する手だてを考えるなら、Julienの考えている hypocrisie は普通の hypocrisie とは異なるのであり、しかもその意味のズレに Julien も、他の登場人物も、また読み手も普通気づかないのだとする他ない。

そこで次のように考えてみよう。この Julien の個人言語における hypocrisie は、心の内を決して直接外へ表わさないことを義務と見做すことを意味する、と。そのため彼は常に心の本当のところと全く隔った感情、意見を表わす記号や、あるいは真だか偽だかわからないような両義的な記号を発する。重要なのは、このことが定言命令であって、必要があろうがなかろうが必ずそうしなければならないということである。目的は関係なくて、本心を隠すことだけが大切なのである。それさえつらぬくなら、自己の行為が現実においてどんな結果をひき起こそうとも彼は無頓着なのである。

これは合目的性を重視する普通の hypocrisie とは当然大きく異なる。いわば hypocrisie という神を持った宗教のようなものだから、この Julien の hypocrisie を、culte de l'énergie ならぬ culte de l'hypocrisie (hypocrisie 信仰) と呼んでみよう。

こうしてみると Julien の行動の持つ宗教的様相が見えてくる。たとえばうっかりナポレオン崇拝という「本心」を暴露してしまったとき折れてもいない腕を縛りつけて自らを罰する Julien は、hypocrisie の実践者というより hypocrisie の苦行僧と表現した方がびつたりくる（第1部第5章）。同じ章で「自分の hypocrisie に役立つ」と考えて教会に入っていく Julien は、その行動で何か得をするわけではないから、hypocrisie を行なっているというよりむしろ hypocrisie の神殿に詣でているという印象を与えるではないか。

Julien はこの「信仰」にとらわれているのであって、決して「自由」であるとは言えないのである。

5. 読み手には意図の虚構性がみえない。

さてこの hypocrisie 信仰説から二つのことが帰着できる。まず一つは、このような妙な「信仰」を義務としてしまうと、当然心の中を卒直に表現する行動がとれなくなってしまうことになる。たとえば本当に愛を感じている相手に I love you が言えなくなってしまうのである。内気な青少年永遠の悩みといったところだが、とにかくこのままでは身動きできない。

そこでこういう場合 Julien の心理は迂回路を通るのである、と考えてみよう。普通の hypocrite がある意図のもとにニセの外観をとりつくろうなら、Julien は逆にある言動をするためにニセの意図を自分に対してでっちあげるのである。こうすれば彼は形の上では hypocrite のつもりでおれることになる。

Julien の愛の告白の場面はその典型的な例と見ることができよう。Julien はレナル夫人を愛しているので「hypocrisie 信仰」の立場から、愛の言葉を発することを禁じられている。だから彼は、夫人を愛していないつもりになって、その上で hypocrisie の言葉として

愛を告白するのである。

ここで一つ重要なことを指摘しておかねばならない。それは、今述べたようなメカニズムが本当にはたらいていたとしても、読み手には Julien = 普通の hypocrite と映らざるを得ない、ということである。何故ならこのような解釈は、読み手の知っている Julien の意図の裏に一つの顕在していない意図を想定して成立しているわけであるが、この「裏の意図」は「hypocrisie 信仰」を仮定してはじめてその存在が要求されるのであり客観的基準による存在確認ができないからである。

もう一つ例を挙げよう。家庭教師たる Julien をレナル家から引き抜く役目でやってきたモジロン郡長の勧誘に対する Julien の反応である。

今度は Julien の番だった。もう一時間半もいらして待っていたのだ。彼の答えは完璧だった。特にその長たらしいことと言ったら司教の教書のような感じだった。何でも言っているようで、実は何もはっきりと言っていないのである。レナル氏に対する尊敬、ヴェリエール住民への敬意、そして立派な郡長さまへの感謝とがその中にあるらしかった。郡長は、自分よりジェズイットなのに驚いて、何か確かな言質を得ようとしたが無駄だった。調子にのった Julien は、練習のためのいい機会だというわけで、別の言葉を使って答えをやり直した。(第1部第22章⁽⁸⁾)

「自分は今ウソをついている」というクレタ人のパラドクスを思わせる答え方だが、これも「hypocrisie 信仰」の強制する態度と解釈できる。彼はレナル家を出る気はないし、少なくともそれで得をしようという気はない、というのが彼の本心ならば、⁽⁹⁾モジロン氏や彼に依頼した張本人らしいヴァルノ氏自身への Julien の答えは、読み手の印象とは反対に、嘘とは言えないのである。ただその本心を彼は素直には表現できない。それで「練習のためのいい機会」などというもっともらしい口実をつけて自分をだまし、わざわざ自分の本心を嘘めかしてしまうのである。この場合、Julien にはこういう態度しかとれないわけである。

ただこのような Julien の姿は、読み手の目からは当然 hypocrite に見える。この場合なら、あらわには書かれていない hypocrite 的意図を自発的に想定してしまうからである。たとえ Julien があとでその意図の達成を自ら拒否しても読み手には、彼は気が変わったのだと解釈して納得する余地が残されているのである。

この例と先の例で指摘した「結局読み手には Julien が hypocrite に見えてしまう」ということは、Julien と読み手との関係において重要な意味を持っている(第7節参照)。

6. hypocrisie 信仰の「恩恵」が、読み手には自然なものに見える。

「hypocrisie 信仰」説からのもう一つの帰着は因果性の問題にかかわるものである。先

に述べたとおり、「hypocrisie信仰」説によればJulienは行動の結果に対して無関心だということになる。ここで起る問題は、それにしてはJulienはいろいろな事であんまり成功しすぎると印象を受けるということである。結果に無頓着な人間ならもっと失敗してもよさそうなものだが、Julienはレナル夫人を手に入れ、ピラール師に才能を認められ、社交界の花形マチルドを手に入れ貴族になる。少し話がうますぎるのである。

このことについて筆者にできる説明はあまり見映えのいいものではない。結局、話がそうなっているのだ、というだけの事であるから。しかしこのことを次のような言葉で言い換えることができるように思える。つまり、Julienのあがめるhypocrisieという神様はなかなか靈驗あらたかで、信者たる彼に偶然という形で恩恵を与えるのである、と。そしてJulienはその偶然の恩恵を、自分のhypocrite的行為の当然の「結果」として受けとめる、あるいは受けとめたがるということなのである。

たとえば些細な例ながら、作品に登場したばかりのJulienを読み手に印象づける場面を挙げてみよう。彼を家庭教師に欲しいとレナル氏から申し出をうけたJulienの父が、事情をあきらかにしようとして息子を問いつめる件である。

「できるもんならでたらめ言わずに答えてみろ、本気違い。レナルの奥さんをなんで知ってるんだ、いつ話しかけた？」

Julienは答えた。

「話なんかしたことありません。教会で見かけただけです。」

「見かけたっちゅうより見つめとったんじゃろ、厚かましい奴め。」

「そんな！ 父さんも知ってるはずでしょう、教会じゃ僕には神さましか見えないんだ」とJulienが付け加えたのには、ちょっとしたhypocriteの調子があった。彼によるとこういうのが平手打ちを避けるのに最良の手段なのである。(第1部第5章⁽¹⁰⁾)

結果としては結局なぐられなかったのだが、それはhypocrisieのせいなのだろうか。急に金づるになりそうになった息子をソレルじいさんはこれ以上なぐる気はなかったかもしれない。しかし重要なのは、結果という観点から見れば当初の目的が達成されているので一応hypocrisieが有効だった形になってしまっているということである。

今度はJulienにとってもっと重要な意味を持つ例を挙げる。心変わりしたマチルドをもう一度自分のものにするためにJulienはコラゾフ公に教わった策略を実行に移して「成功」する件である。策略とは、フェルヴァック元師夫人を愛しているふりをして手紙のやりとりをすることである。つまりマチルドを故意に無視して逆に彼女の気をひくことが狙いなのだが、偶然彼女はJulienが元師夫人の手紙を封も切らず放ったらかしにしていることを見つけてしまう。このような事態はもとのプランでは想定されておらず、その意味でこのhypocrite的策略は失敗である。マチルドがもし普通の女だったら、あるいは真相を見

破ったかもしれないが、皮肉なことに、この瞬間にこそ彼女は Julien に屈服する。この場面は非常にアイロニックである。

マチルドは我を忘れて叫んだ。

「あなたはあの方とよろしくやっているだけじゃなくて軽蔑までしてるのね。あなたみたいな何も持ってない人が、元師夫人のフェルヴァックさんを軽蔑するなんて！」

「ああ、ごめんなさい」彼女は Julien の足元に身を投げた。「私を軽蔑したければして。でもそのかわり愛して。もうあなたの愛なしでは生きていけません。」そして彼女は本当に気絶してしまった。

この高慢な女が、本当に、俺の足元に！と Julien はつぶやいた。(第2部第29章⁽¹¹⁾)

このように、事の推移は計画通りではないが、「hypocrisie 信仰」を守れば、必ず成功がもたらされる形になっているのである。

ただし、Julien にとって、また読み手にとってこの特異な因果律はそれと指摘するのが困難である。一般的に言っても意図と、行為と、意図の達成があるように見えるとき、それらをそれぞれ独立のものとするのは大変困難なことなのである。⁽¹²⁾ このことが次節で扱われる Julien と読み手との「共感」の問題に直接かかわってくる。

7. Julien と読み手との「共感」

ところで今見たような Julien の行動に関する因果性の特殊さを指摘するのは別に筆者がはじめてではない。たとえば次のような論法はよくみうけられる。

Julien の努力は全て効果がない。効果がないからこそ彼の成功に貢献するのである。なぜなら誘惑者の役割を自分のものにしようとするほど彼はその無邪気なところを暴露するからである。(Grahame C. Jones⁽¹³⁾)

この論法にはそれなりの説得力があるが、それだけに危険である。失敗するから成功する、自然さ *naturel* を暴露するから成功する、というのでは、『赤と黒』は単なるおとぎ話になってしまう。成功のために、意志の強さも、行動力も、何も必要ないことになってしまう。

だからこそこれまで述べてきたこと、即ち Julien が無理に自らを hypocrite とみなし読み手もそう思うこと、そして「hypocrisie 信仰」が偶然成功をもたらすのを Julien も読み手も当然のことのよう感じることに、これらが重要になってくるのである。結論を先に述べると、『赤と黒』を読むことの魅力は、Julien と共に自分をリアリストであると信じながらおとぎ話に近い世界の中を進むことにある、と筆者は考えるのである。

ここまで「Julienはhypocriteではない」として論をすすめてきたが、筆者はそのことによって「Julienは普通のhypocriteである」とする読みを否定しさろうという気は毛頭ない。それどころか筆者が主張したいのは、仮りに「hypocrisie信仰」説が成り立つなら、逆に「Julienは普通のhypocriteである」として読みを遂行する方が、そのあとの正当化をどうするのであれ、むしろ本来的な読みであるように見えてくる、ということなのである。

「Julienはhypocriteである」とする読み手とJulien自身とは、行為の逆転した意味づけを共有している。即ち、「hypocrisie信仰」説の立場からみると、そういう読み手とJulienとは両者ともJulienの行為に恣意的で不当な《hypocrisie》というレッテルを貼ることによって、一種の共犯関係に入るのだと見える。またこのような読み手とJulienとは因果性の認識をも共有している。《hypocrisie》と名づけられた行為とみかけの意図の達成が継起的に出てくるために、両者の関係を偶然的ではなく因果的なものととらえてしまう。hypocrisieという言葉の意味的ひろがりや、諸事象間の関係を不明確なものにしてしまっているのである。

このようにして読み手はJulienの意志力と行動力を愛でることができるわけである。筆者には、こういう読みのできる読み手こそ幸せな読み手であると思える。もしも架空の主人公に対する読み手の「共感」の程度が量られうるものとしたならば、『赤と黒』でこのような読み手の実現しているものは、その最も高い数値を示す部類に属するものと言えるのではないだろうか。

注

- (1) 第2版, 1985。なお以下の和訳は全て筆者によるものである。
- (2) *Stendhal romancier*, Paris, Table Ronde, 1947, p.195。
- (3) *Stendhal et les problèmes de la personnalité*, Paris, Corti, 1958, pp. 311-12。
- (4) 底本はPléiade版(1952)を用いた。以下引用の概当する個所の頁数を示す。pp. 291-92。
- (5) 第1部第21章の最後のところ。p. 344。
- (6) 第2部第40章。p. 669。
- (7) 第2部第10章。p. 506。
- (8) pp. 345-46。
- (9) 「『でもあの申し出を受けようという気になったことは一瞬だってなかったんです』とJulienは言い張った。」(第1部第23章, p. 367) もっとも読み手はこの言葉も偽、あるいは少なくとも誇張であると考え権利を持っているのだが。

- (10) p. 234.
- (11) p. 615.
- (12) こういった因果性の問題は日常生活においてさえさまざまな困難をひき起すのに、
虚構の文学においてはなおさらである。たとえば Roland Barthes は、読みの単位
となる *séquence* は「既になされた」か「既に読まれた」の論理しか持っていない
と述べている(*S/Z*, Paris, Seuil, Collection Points, 1970, p. 26)。
- (13) *L'Ironie dans les romans de Stendhal*, Lausanne, Grand Chêne, 1966, p.
71.